

# 神のおとずれ

日本聖公会 神戸教区報



2015年  
5月号

発行所  
神戸教区事務所  
TEL 078(351)5469  
FAX 078(382)1095  
<http://www.nskk.org/kobe/>

発行責任者  
司祭 芳我秀一

印刷所  
文明堂印刷所

## 一粒の麦が

## 地に落ちて死ねば

司祭 ペテロ 中原 康 貴

今から150年前の1865

年、まだキリスト教が禁じられている中、長崎に大浦天主堂が献堂され、多くの日本人がその珍しい建物を見てきてきました。そして、献堂から一ヶ月が過ぎた3月17日、神父が昼の祈りを献げていると、ある女性と一群が近寄って神父に告げました。

「ワレラノムネ、アナタノム

ネト オナジ」

彼らは250年間、厳しいキリシタン禁教令が布かれている中、信仰を守り続けた潜伏キリシタンでした。そして、彼らとの奇跡のような出会いを目の当たりにした神父は、この喜びの出来事を世界に発信し、その知らせは『東洋の奇跡』として、世界中の教会への福音となりました。



高木仙右衛門の墓

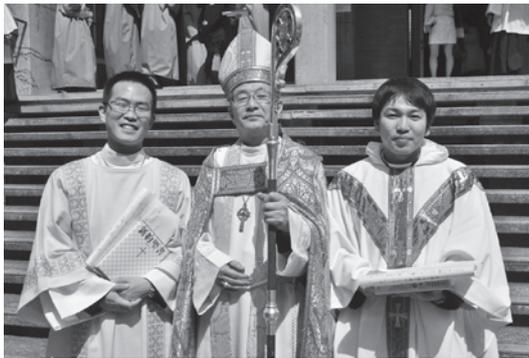
しかし、この出来事は喜びの再会であると共に、悪夢の再開でもあったのです。  
\* \* \*  
230年ぶりにパードレ(神父)との再会を果たし

た浦上村の潜伏キリシタンたちは、それまで隠し続けていた信仰を公に告白するようになりましたが、すぐに主だった信徒83人が奉行所に捕えられました。そして、捕えられた人たちは厳しい拷問を受けるとすぐに、「改心する」と言いました。仕方ありません。彼らはそのようにやり過ごすことになって、250年間を生き抜いてきたのです。しかし、このとき、たった一人、高木仙右衛門という人だけが改心することを拒み、すでに改心した者の誘いの言葉にも耳を傾けず、牢に留まり続けたのでした。

改心を表明した人たちは釈放され、村に帰されました。しかし、村に帰ると「信仰を捨てた者は入らぬ。仙右衛門を見習え」と言われて、誰も家の中に入れてもらえなかったのです。困った彼らは再び奉行所に行き、改心の撤回を申し出ることとなりました。すると、潜伏キリシタンの存在には気づいていたものの、今まではこのような反抗を経験したことがなかった奉行所は、この出来事に戸惑い、混乱しました。そして、西洋諸国の目もあって、仙右衛門を含むすべての人が釈放されることになったのです。

その後すぐ、江戸幕府は大政奉還し、長い間、潜伏し続けていたキリシタンたちは、新しい時代の幕開けに「これで自由の主の御名を賛美することができ」と胸を膨らませました。  
\* \* \*  
明治政府は前政権である江戸幕府の体制を徹底的に批判しました。しかし、キリシタンたちの期待とは裏腹に、キリシタン禁教令は継続されることになりました。明治政府は天皇を中心とした神社神道によって、国を統率しようとしたからです。  
そして、明治政府は高木仙右衛門をはじめとした浦上村のキリシタン3394人を西日本の各地に配流し、彼らの多くは配流先で再び厳しい拷問とともに改心を迫られました。その厳しさがどれほどであったかという点、配流先で662人が命を失ったほどでした。  
しかし、彼らの血が日本に信仰の自由をもたらしたのです。1859年の開国以降、ウイリアムズ主教をはじめとした宣教師たちは、江戸幕府や明治政府にキリスト教を伝える自由を求めてきました。しかし、これまでは「日本にはキリスト教を信じる者はいない。押し売りするな」と言われると強く訴えることができませんでした。しかし、各地に配流され、厳しい状況に置かれても耐えていた大勢のキリシタンの存在が、「日本にはすでに多くのキリスト教を信じる者がいる」という何よりの証となったのです。  
彼らの命を救うべく、各国各教派の宣教師は丸となって母国に働きかけ、明治政府の暴挙を止めようとした。そして、世界中から強い非難を受けた明治政府は、1873年にキリシタン禁教令の高札を撤去せざるを得なくなったのでした。  
\* \* \*  
今、私たちは信仰の自由が当たり前だと思っていますが、その自由はこのような困難を経て得られたものです。そして、それは現在、再び侵されようとしているようにも感じられます。さて、私たちは未来のために、今、信仰によって何を蒔くことができるでしょうか。  
(神戸聖ペテロ教会牧師・神戸国際大学 非常勤チャプレン)

# 聖職按手式 司祭1名、執事1名、誕生!!



3月21日(土)、神戸聖ミカエル大聖堂で聖職按手式が行われ、ミカエル杉野達也執事が司祭に、セバスチャン浪花朋久聖職候補生が執事に按手されました。教区内外から約250名の人々が集まりました。

説教壇に立たれた山野上素充司祭(大阪教区・退職)は「主イエスの十字架のドラマは、聖職按手という形で続いている。主イエスの十字架は人間の罪のゆるしの現れだから、聖職按手も罪のゆるしのそれであり、今、

皆さんが彼ら二人を支持するということは、皆さんの罪がゆるされるという証である」と語られました。

この度は、按手式の最後に新司祭・新執事の挨拶の時間が設けられ、杉野新司祭は「司祭聖別で手を置いていただいた際、首が折れるのではないかと、というくらい重たかったのですが、その重みはこれからの責務の重さだと感じました」と話されました。また、浪花新執事は「神様は、こんなに弱い私であるのに、これから執事として用いてくださるうとしています。皆さん、これからもよろしくお願ひいたします」と話されました。

聖職按手式後は、地下ホールで新司祭、新執事を囲んで祝会が行われました。祝会では、教区主教と若者たちによる歌と踊りが披露され、場内は大いに盛り上がりしました。

新司祭、新執事の新しい出発を私たちみんなが支えていきましょう。(長田 記)

## 被災地の今 発生から4年を経て

執事 イサク 坪井 智

3月20日から24日にかけて、松蔭高等学校ならびに神戸松蔭女子学院大学の生徒・学生10名が、東日本大震災の被災地を訪問しました。このプログラムは、震災一年後の2012年から継続して行っているもので、今年も大学生も加わり、福島県新地町を訪れました。現地では一緒に歩こうパートIIのサポートを受け、被災者と共に逝去者のための祈りを献げ、震災体験を聞き、海岸の清掃や仮設訪問などの活動を行いました。



関西では震災に関して話題になることが少なくなり、またが、現地では今なお震災は終わっていません。いよいよ復興に関して差が広がり、殊に高齢者や社会的な弱者、原発被災者などがドンドン取り残されている感じがあります。被災された方々も、今の悩みを聞いてほしい、次の世代に体験を伝えたいと熱望されていました。熱心な語りの中に苦しみ悲しみが、いよ深く、焦りの思いがあることを感じました。生徒・学生たちも今回をきっかけにして自分たちでできることをしなければならぬことを模索し始めたようです。



プログラムの打ち合わせのため、冬休みに現地に行ってきましたが、その際制限付きながら通ることができるようになった国道6号線を南下し、原発2キロ地点や強制退去させられた富岡町を訪ねました。その時の衝撃は忘れられません。原発に近づくにつれ線量計の数値は上がり、最高で11マイクロシーベルトを記録。まだまだ人が安全に住むことができないことが分かります。その様な地域は、4年前から時間は止まっ

たままです。津波で流され、ひっくり返った車、壁が壊れ、荷物がごちゃごちゃのまま放置されている家が点在し、さながら地震発生直後の様子が残されていました。復興などどこ吹く風の状況です。

現在、日本聖公会が行っているプロジェクトは、次第に原発被災者などの取り残された方を支援していくものへとシフトしていきます。イエス・キリストの体に連なる私たちも、イエスが苦しめられていた者に積極的に関わったように、自分の痛みとして、現地の人々とつながり、果たすべき課題を見つけ、行っていくべきものです。(松蔭中学校・高等学校 チャブレン)

**フィリピン  
ワークキャンプに  
参加して**

パウロ 野間 陸

2月27日から10日間、フィリピンワークキャンプに参加しました。僕が滞在したのはジャンボリーという山中の村で、教会の駐車場、階段作りのワークを行いました。

僕がこのキャンプで最も心に残っているのは、村の子どもたちとの時間です。教会までの道中を毎朝付き添ってくれる子、ワークをしているのを遠くからじーっと眺めている子、「夜は一人で出歩くな」と注意してくれる子、すれ違いざまに「ハンサム！ハンサム！」と声を掛けてくる子。たくさんのおもたちがいつも僕の周りにいました。そしてそのこともたちや親までもが、上手な「人生の楽しみ方」を知っていたのです。

実は、フィリピンに行く前にある方から「フィリピンで『豊かさ』とは何なのかに気づける」といいな」と言われていました。ですからフィリピンにいる間中、その言葉が僕の頭の中をぐるぐる回っていたのですが、ある日、その言葉の意味が自分なりに理

解できた瞬間があったのでした。それは村の子ども一人、ポチヨが1歳の誕生日を迎えた日のことでした。その日は朝からポチヨの家族やご近所さんが集まって、色とりどりの風船、おそ

らくパーティーの時にしか作らないであろうお菓子、また特大のバスデーケーキなどの準備をしていました。そして、パーティーが始まって、バスデー



ランチとお菓子も食べた後、ご近所さん総出での椅子取りゲームが始まりました。それは日本でやってもまず盛り上がりがない

であろう、ただの椅子取りゲームです。でも、みんなが大爆笑していたのです。大人は子どもがやっているのをただニコニコ見守っていたのではなく、全員が参加して大爆笑して、その椅子取りゲームを楽しんだのです。その情景を目の当たりにした時、

そしてまた自分自身とその情景のひとつになった時、先程の「豊かさ」という言葉が僕の中に落とし込まれた気がしました。この人たちは本当の意味での「楽しみ方」を知っている、と。

テレビもゲームも電波もないこの場所で、いつも当たり前前に楽しんで生きていることが純粹に羨ましく思えました。でもそれは、テレビもゲームも電波もないから、ではありません。彼らはどんな時にも精一杯楽しんで

いるからそのように思えたのです。この椅子取りゲームだけではなく、牛のフンだらけの道を歩くのも、炎天下でワークをしてヘトヘトになるのも、ダンスバトルをするのも、彼らにとってはみんな同じなのでしょう。どんな状況でも楽しむ事の出来る力、それは彼らが持っているものを、持ち過ぎて、与えられ過ぎては僕にはない、しかしそれは生きる上ではとても重要な「豊かさ」だと感じました。

言語も考え方も文化もルールも違うのが当たり前の中で過ごした10日間、今回のキャンプではフィリピンのスタンダードの中から日本のスタンダードのあり方を考えさせられました。ありがとうございました。

(姫路顕栄教会信徒)

**U26に参加して**

アウグスティヌス 田北 圭吾

2月20〜22日に行われた、U26集会に参加しました。今回は八つの教区から18〜26歳の青年(U26と言う名称の由来です)が集まり、3日間のプログラムを通して、交わりの時を持ちました。20、21日は青年担当者会議も行われたため、全教区の「キリスト者」が会場である市川市少年自然の家を集ったことになります。

プログラムのの中では、青年交流の計画を練る場が設けられました。神戸教区は、九州教区が計画している「ヒロシマーナガサキ 平和の旅 by チャリ」に沖縄教区と加わっていく方向で話し合いました。略して「平チャリ」は、8月6日の礼拝後に広島を発ち、8月9日に長崎に着くよう、自転車で行脚するというものです。教区を跨ぐ活動を青年交流に活かす狙いがあります。

私は、この数日でふたつのことを再認識しました。ひとつは、教会もボーダレスの局面を迎えているということ。今回の交わりを通して、自身の教会だ

けではなく、教区や教派のボーダーを超えて、他の教会を含めた「わたしたちの教会」と捉えなければならぬと感じました。そこでは、女性司祭や財政に関する議論は二の次に思えます。また、祈ること、「共に集まる、語り合う、響きあう」(聖歌442番1節)ことを普段の教会生活でいかにしていないかという、反省の念もありました。

もう一点は、聖職と信徒で共に教会を創り上げる意識です。今回のテーマはCompassionとありますが、参加者達との交わりを通して、教会の本質が共に(Com)熱情、苦しみ(Passion)を分かち合うことにあるのだろうと思ひ起きました。紙幅の都合上、詳述は出来ませんが、今回の集いは個々のPassionに触れる機会に恵まれていました。今日の教会に望まれるのは、Compassionな交わりなのかもしれませぬ。聖職が信徒をリードするのではなく、立場を超えて共に交わり、その様な関わり

の場を追い求めたいものです。その道のりは狭い門(マタイ7・13)かもしれませぬが、その道が真理と命(ヨハネ14・6)に連なっていることを願っています。

(神戸昇天教会信徒)

# 広島平和礼拝2015

司祭ヨシユア 長田 吉史

今年には戦後70年、さらに壮絶な地上戦となった沖縄戦、そして広島・長崎への原爆投下70周年の年です。その年にあたり、

広島では今年の平和礼拝開催(8月5日(水)・6日(木))に向かつて準備が進められています。その一つは、プログラム内の「碑巡り」を担当するガイド

の方の研修です。これは次世代に「戦争の愚かさ」、また「主にある平和」を伝えるためには欠かすことのできないプログラムの一つです。そこで、この度はその研修に参加した遠藤洋介神学生の感想を紹介いたします。

\* \* \*

3月19日(木)に広島復活教会主催の碑巡りガイド研修会に参加しました。私自身は、実家が広島から近いということもあり、平和公園や原爆資料館には何度か足を運んだことがあったのですが、その時は授業で習った程度、過去の悲劇という程度の認識で観光をしていました。今回、研修会に参加したのは私を含む8人で、午前中は大本

営跡のコースを周り、午後からはピースボランティアとして活動されている今田洋子先生のガイドを受けながら平和公園を回りました。各箇所丁寧な説明を受け、周り終わったあとで茶話会をしている際に、今田先生がこのように言われました。

「原爆の威力を伝えるだけなら本などで充分。だけど、それでは世界中の核爆弾を無くすことはできない。大切なのは自分で何を感じるか」

私たちが、碑巡りのガイドで伝えられることは本当に僅かです。数字や写真によって当時の状況、戦争の悲惨さ、被爆被害の怖さを伝えることはできませんが、しかしそれだけでは過去の悲劇で止まってしまいます。大切なのはこの地で、目で見て耳で聞いて、ここで起こった真実を自分自身がどう受け止め、どう継承するかだと思います。

\* \* \*

今年の広島平和礼拝に参加予定の方も、まだ悩んでいる方も、戦後70年のこの年に、8月の広島で「平和」について共に考えてみませんか？皆様の参加を心からお待ちしております。

(広島平和礼拝実行委員)

## 鳩だより 《敬称略》

祝 堅 信

3月22日(日)

テレジア 奥田 純子

広島復活教会

ご 逝 去

3月26日(木)

ペテロ 伊勢 順治

徳島聖テモテ教会

教 籍 移 動

3月5日(木)

阿 信 恵 美

日本誓約キリスト教団

水島誓約キリスト教会より

倉敷聖クリストファー教会へ

3月7日(土)

テモテ野中 宏一郎

守口復活教会より

徳島聖テモテ教会へ

## 神学校生活を 終えて

パウロ 歳實 勲  
聖職候補生

神戸教区神学生として、皆様のご支援とお祈りによってウイリアムス神学校で学ばせて頂いたことを感謝申し上げます。私にとって、この3年間は、精神的にも、体力的にも大変厳しいものであり、教会共同体にあって、自己に向き合いながら、神様からの召命感が問われた期間でした。また、多くの恵みが

与えられました。

私はこれから現場に遣わされますが、次のことを心に置いて働かせていただければと思います。一つは高齢化社会にあつて、これらの方により深く向き合うこと。二つは身近にある些細な問題の中にある不公平の芽を感じ取り、その解決に向けた一歩を踏み出すこと。そこに教会が持っている賜物を活かす大切な働きがあると思うからです。4月からは、しばらく週日は「(福)オリンピア」で高齢者との関わりの中からいろいろと学ばせて頂き、主日は神戸市内の教会でご奉仕させて頂く予定です。

どうぞ、これからも益々のお祈りとご指導をよろしくお願い致します。

## 6月の教区関係教役者 逝去記念聖餐式

日時 2015年6月4日(木) 午前10:30  
場所 神戸聖ミカエル大聖堂  
司式 主教 中村 豊  
説教 司祭 芳我 秀一

### \* 6月の記念逝去教役者 \*

8日	司祭	チャールズ	ワレ	ン
13日	司祭	ダニエル	植村	信久
13日	司祭	ヘンリー	ピ	ト
13日	伝道師	マリア	鈴木	峨
19日	伝道師	ヨハネ	伊木	次郎
19日	司祭	ダビデ	横田	豊
20日	司祭		牧岡	鉄和
20日	司祭	トマス	角瀬	史夫
20日	司祭	テス	中道	木
22日	司祭	施洗者	ヨハネ	木
23日	司祭	マタイ	佐々	木
29日	司祭		前田	信

